

## 三池三川坑

明治の産業革命遺産を、世界文化遺産に登録する勧告が出されました。23施設です。そのなかには、端島（軍艦島）、高島、三池などの炭鉱関連施設が含まれています。たまたま昨年から興味をもったため、九州のいくつかの炭鉱をみていました。今回は、三池三川坑の話です。

三池炭鉱は、有明海の海底に掘り進められた炭鉱です。三川坑は海のすぐそば。隣には外国人船員の宿泊施設であった、三池倶楽部がある場所です。通常は非公開。設備もあまり残っていないようです（万田坑や宮原坑などは施設が整備され、公開されています）。

しかし、三川坑は労使関係史の象徴的な炭鉱です。昭和35年に起きた三池闘争の中心であり、昭和38年には炭鉱の衰退を決定づけた爆発事故を起こした場所でもあります。

第二次大戦後、三池炭鉱の労働組合は比較的穏和な組合としてスタートしました。しかし、エネルギー転換のなかで経営が悪化し、昭和28年には指名解雇が行われる事態となります。このときに、最初の大争議が起こり、100日を超えるストライキが行われました。そのときには、労働組合が勝利をおさめます。自信を得た組合員は、向坂学校で学習をしますが、経営状況が好転するわけではありませ

中嶋哲夫の「人事も歩けば」



▶ひっそりとたたずむ三川坑入り口

ん。昭和34年末に、再び経営側が指名解雇を図ります。これに対して組合は無期限ストに突入。昭和35年末に敗北するまで、長期間のストライキが行われました。総資本と総労働の対決といわれた争議です。

争議の過程で三川坑でピケを張っていた久保清さんが、暴力団に刺殺される事件が起きます。生活苦から組合を離脱して第二組合が設立されたりもします。総評（日本労働組合総評議会）と経団連が、各々三池にオルグを送り、応援の警察官を含めると、2万人近い人々がこの地域に入ったという話もあります。

あれから50年。地域で筆者の同世代の方に話を聞きました。「職員の子どもも、第1組合の子どもも、第2組合の子どもも、同じ学校に通っていた。親の対立が子どもに持ち込まれ、今でもわだかまりが残っている」と話してくださいました。

坑口の近くにあった飲み屋街はなくなり、三池倶楽部はレストランになっています。三川坑は、ひっそりとしているのがよいのかもしれない。（MBO実践支援センター代表）